

2013 年度卒業研究

高級住宅地にみる都市空間の商品化

－札幌市円山地区を事例として－

藤女子大学文学部

文化総合学科 1015021

氏名 小松由希奈

指導教員 野手 修

はじめに

第一章 近代社会における都市の構造

1-1 地域構造論

1-2 カステルによる新たな都市構造

1-3 集合的消費

第二章 札幌市円山地区における先行研究

2-1 円山地区のイメージ調査

2-2 札幌市における円山地区の位置づけ

2-3 円山地区の歴史

2-4 内田(2009)による先行研究

2-5 東京における高級住宅地

第三章 社会空間としての都市、文化資本

3-1 空間の社会的生産

3-2 文化資本

第四章 円山地区における文化資本

4-1 札幌市における事業

4-2 円山地区の文化的環境

4-3 円山地区のマンション、商業施設

終章

引用文献・参考文献



## はじめに

一億総中流社会と称された時代は終わり、格差社会と呼ばれるようになった現在、2011年の所得再配分調査の結果では所得格差を示すジニ係数は1999年の調査開始以来過去最大となった。この格差が都市の構造としても表れている。平成23年度の札幌市統計書における区別勤労世帯一か月間の収入では10区中最高の中央区は約54万円、対して最低の東区は約33万円と差が出ている。中央区に位置する円山・宮の森地域は所謂高級住宅地と呼ばれる富裕層が多く居住する地帯である。高級住宅地という語感からわかるように都市空間は一種のステイタス、商品としての価値を持つようになっているのである。そもそも都市の格差はどのように表れ、富裕層が多く住む地域ができるのか。高級住宅地という明確な定義なく、主観的なイメージによって認識されている。しかし、人々は共通してその地域に高級さを感じている。

そこで本論ではこの高級住宅地と呼ばれる都市空間はいかなる要素で形成され、維持されその価値を保っているのか札幌市の円山地区を事例に考察していく。

まず第一章では、これまで都市がどのように研究対象として捉えられてきたのか、都市社会学の学説史をまとめ、都市の構造の形成について確認する。都市社会学の始まりであるシカゴ学派の地域構造論が発表され、後にマニュエル・カステルによりそれを否定する空間として都市を捉えた新たな都市論が生まれた。カステルはさらに集合的消費の概念を用い、都市空間が経済のグローバル化や格差の拡大によりどう変化したのか論じている。

第二章において高級住宅地にかかわる先行研究を検討する。札幌市の円山地区においては内田(2009)により不動産価値による分析が行われており、「高級住宅地の外部環境のなかでも文化的環境の質が重要要因であることを明らかにしている。具体的には優れた義務教育環境を備える地区は、就学児童を持つ若い世帯をその住宅地に流入させる誘因があり、それが住宅地の流動性を高める。その結果として、高級住宅地ブランドが維持されている」とした結論を受け、不動産価値だけではない要因、教育以外の文化的環境の質とはなにか考察していく。また、東京における高級住宅地、田園調布や成城の歴史的形成とその特徴を調査し、円山地区との共通点と相違点を考察する。

ここで、第三章においては第一章で述べたように空間として都市を捉えるにあたりルフェーヴルの「空間の生産」の概念について述べ、都市構造との関わりを考察する。さらに、不動産価値以外の文化的環境とは何か考察するために用いたのがブルデューによる文

化資本の概念である。文化資本とは広い意味での文化に関わる有形・無形の所有物の総体を指す。この文化資本を含む経済資本や社会関係資本等の資本の総量や構造により条件づけられるのが「ハビトゥス」である。ハビトゥスとは個人のうちに内面化された規範であり、人々はこのハビトゥスにより無意識のうちに社会構造に従い、その構造を維持し存続させるような行動をとるのである。

第四章においては円山地区の飲食店のデータや、分譲マンションの広告等からどのような文化的環境があり、高級住宅地としての価値を維持しているのか考察する。

## 第一章 近代社会における都市の構造

### 1-1 地域構造論

都市社会学の研究者ルイス・ワースによると都市とは「社会的に異質な諸個人の、相対的に大きい、密集した永続的な集落」(Wirth 1938)と定義されている。産業革命以前の段階では都市と農村を比較的に捉えていたが、資本主義、高度消費社会の現代においてもはや単純な指標で都市を捉えることはできない。都市空間は多様な要素が複雑に絡み合い構成されているのである。

米国の都市社会学者アーネスト・バージェスは1925年シカゴを調査地域とし都市の地域構造の理論として同心円地帯理論を発表した。都市の空間的パターンを最も中心部に「中心業務地区(ループ)」、その周りを軽工業地区で安価で劣悪な住宅地区である「推移地帯」、「労働者居住地帯」、中産階級の「住宅地帯」、郊外住宅地区である「通勤者地帯」の5重の同心円によって示した。(図1)

- Iループ
- II推移地帯
- III労働者居住地帯
- IV住宅地帯
- V定期券通勤者地帯

図1 同心円理論

中心部には政治や商業の要としてビジネス街、繁華街が形成されその周りを囲むように中心部の生活を支えるサービス業の従事者が暮らし製造業は周辺地域に追いやられていく。更にその周りの通勤地帯には中間階級の住宅地帯が形成され、環境のよい周辺部には高所得者層が住む。この都市の中心部には居住環境は劣悪だが中心部を離れられない低所得層の労働者が住み、環境の良い周辺部に高所得者層が住むという地域構造がこの同心円地帯理論の特徴である。このパーージェスを代表とする欧米のシカゴ学派と呼ばれる都市社会学の流れは生態学の視点を人間社会に応用したもので都市を単なる人口の集積としての容器のようなものとして捉えていた。シカゴ学派は都市を住民が資本主義の経済法則に従い行動したときの所産として扱ったのである。

その後、この同心円地帯理論を批判・修正する研究も発表された。ホイットはセクター理論において地代の高い地帯はパーージェスの同心円地帯理論ではなく扇形に展開し、工業地域は交通機関に沿って立地する傾向があると論じた。また、ハリスとウルマンは多核心理論において都市には歴史的に形成された複数の核が存在し、それらを中心に土地利用の型が決定されるとする多核理論を論じた。しかし、これらの理論はあくまで自国中心主義であり、他の国の条件の異なる都市では当てはまらない点も数多くあると指摘する声が多い。製造業が衰退し金融業や情報サービス業が台頭し経済を担う現在、この構造は変化している。経済のグローバル化により資本主義構造は変化し労働者階級を単純に分化することは不可能となり、新たな都市の構造が形成されているのである。

## 1-2 カステルによる新たな都市構造

カステルは著書『都市・情報・グローバル経済』の中で「近年の都市研究文献のなかでは、空間は社会の表現である、という定式を用いることが慣例となっている。」（カステル 1999）と述べている。カステルは前述したシカゴ学派の地域構造論を単なる研究の出発点とし、現実の多くの都市では歴史的に与えられた条件、社会構造、国家の介入、それぞれの場所に付与されたイメージなどが空間の構造を決定し、経済のグローバル化が新たな変化を付け加えていると主張した。経済のグローバル化が進み、製造業は賃金の安い発展途上国や周辺地域に移転してしまった。これにより、大都市では職業構造が高度な技能や判断力を必要とするものと単純労働とに分極化し、このため所得格差が拡大する傾向があると論じている。

例として、労働者階級の居住地区であった中心部の外周部が製造業の衰退により再開発

され、高所得者を対象とした住宅や商業地帯が建てられ元の住人は移動を強いられる現象が起きている。この現象は「ジェントリフィケーション」と呼ばれ、「富裕地域化」と訳すことができる。また、既にアメリカでは定着している「ゲートッド・コミュニティ」と呼ばれる居住形態が登場した。これは安全性を求め居住地を囲む壁を持ち、車や歩行者の流入を制限し防犯性を向上させた排他的な居住空間であり、都市空間の階層分化を推し進めているといえる。近年、日本の都市にも防犯性の高さを誇る有人監視システムを売りにする都心の高層マンション等が現れている。このように所得格差の拡大が都市を富裕層の隔離、貧困層の封じ込めともいえる構造に変化させていることがわかる。本来、開かれた空間であるはずの都市の公共性は失われつつあるのである。

### 1-3 集合的消費

これまで都市の定義は様々であったが、カステルは集合的消費の場として都市を捉え労働力は消費活動を通じて再生産されると論じた。もともと経済学者マルクスの用語である「労働力の再生産」とは、労働することにより消耗した体力を回復するための休息や睡眠、食事といった短期的な再生産と、世代的に子供を産み労働力の担い手を作る長期的な再生産との二つの意味がある。集合的消費とは主に家庭において個人で自分の所有する消費財を消費する個人消費に対し、公共的な性格を持つ消費手段のことを指し、集合住宅、交通、医療施設、文化施設等の消費活動において使い果たされないサービスのことである。この集合的消費は特定の空間の中で暮らす人に適合させられるものであり、都市がその単位となる。このことから都市が単なる人口の集積ではなく労働力の再生産の場の単位であるといえるのである。カステルのこの主張は都市を資本主義構造の中に明確に位置付け、消費と労働力の再生産こそが都市を研究対象とするときの本質的な要素だと考える根拠となった。現代では、都市の広がりを超えて国家や世界経済に関連し、空間が社会的に生産され消費されていると考えることができる。

## 第二章 札幌市円山地区における先行研究

### 2-1 円山地区のイメージ

内田（2013）は高級住宅地（高級住宅街）の特徴が住民に流動性があり、その価格に代表されるような価値を減衰させない仕組みを持つ町であることから、一つのエリアブラ

ンドまたはゾーンブランド、あるいは住所そのものがブランドとして機能するようなアドレスブランドとしても捉えることができる点であると述べている。高級住宅地という単語自体、大衆のイメージからくるもので、これまではっきりとした定義はなされていない。まず、円山地区に対する札幌市民のイメージ、そして本当に高級住宅地といえるのかどうかを確認していきたい。

札幌市が公示している地価情報によると住宅地（市街化区域内の第一種低層住居専用地域、第二種低層住居専用地域、第一種中高層住居専用地域、第二種中高層住居専用地域、第一種住居地域、第二種住居地域及び準工業地域並びに市街化調整区域並びにその他の都市計画区域内並びに都市計画区域外の公示区域内において、居住用の建物の敷地の用に供されている土地）の平均価格は札幌市全体において 58,000（円/㎡）であるのに対し、中央区は 10 区中最高の 99,600（円/㎡）、最低の手稲区は 49,600（円/㎡）となっている。

また、平成 23 年度の札幌市統計書における区別勤労世帯一か月間の収入では 10 区中最高の札幌市全体において約 43 万円、中央区は約 54 万円、対して最低の東区は約 33 万円とここにも差が現れている。

株式会社インサイトが運営する札幌の広告媒体をまとめたサイト「札幌.com」が札幌圏の男女 600 人を対象に行った「住みたい町ランキング・エリアイメージ調査」によると、円山エリアは 31.8%の支持を受け、大通周辺、琴似に差をつけ一位となっている。

1位	円山エリア	31.8%	6位	創成川イースト周辺	16.3%
2位	大通周辺	22.5%	7位	宮の森	12.7%
3位	琴似	20.5%	8位	福住	12.5%
4位	札幌駅北口周辺	19.3%	9位	真駒内	11.7%
5位	桑園駅周辺	16.7%	10位	西18丁目駅周辺	11.5%

表 1 住みたい町ランキング 調査結果 (2012)

さらに、円山地域のイメージについて、74%が「高級住宅街である」と回答しておりこのことから札幌市において円山地域が高級住宅街であると多くの市民から認識されていることがわかる。（表 2）また、円山地域に隣接する宮の森地域については住みたい町ランキングでは 12.7%の 7 位であるが、イメージ調査によると 62%が「高級住宅街であると」回答している。円山は「高級住宅街である」という市民の認識と、居住地としての人気をどちらも持ち合わせていることがわかった。

Q:「円山エリア」のイメージについてあてはまるものをすべてお選びください。(いくつでも)

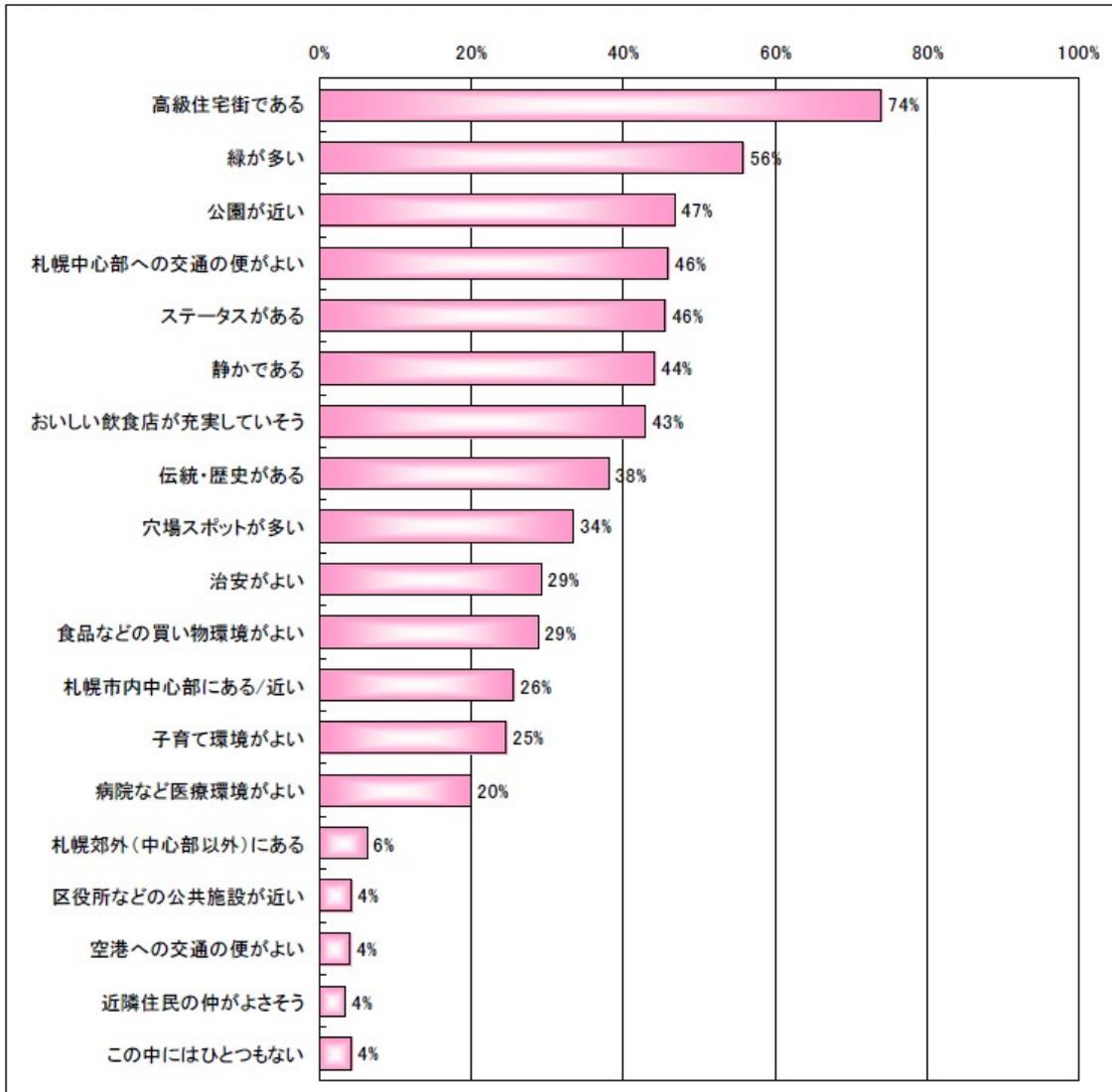


表2 「円山エリア」イメージ調査

## 2-2 札幌市における円山地区の位置づけ

札幌市の扇状地西端の円山を中心とした地域、ここでの定義をほぼ西20丁目以西、北5条以南の住所としては円山西町・宮の森を含む範囲を円山地域として取り上げる。

札幌市の不動産屋、双子山不動産が運営するサイトにおいては

“誰もが憧れる札幌市中央区のウエストエリア。

都心からわずか3km、ワンランク上の便利で快適な環境で暮らすステイタス。

円山・双子山・旭ヶ丘・界川・円山西町・伏見・宮の森を中心とした、人気のブランドエリアを「札幌ヒルズ」と呼びます。”

と表記されている。

また、株式会社メガ・コミュニケーションズが運営する地域情報サイト「コーナー円山」では円山・宮の森地域をさらに広く下図のように設定している。(図2)

このことからわかるように“円山”は住所で公的に区分された街ではなく自然発生的にそう呼ばれるようになった地域を指すことがわかる。



図2 地域情報サイト「コーナー円山」アクセスマップ

### 2-3 円山地区の歴史

円山地区は明治3(1870)年頃札幌本府建設に伴い、周辺地域に農村を配置し、食糧の需給地を確保する目的で農業移民を計画し入植が始まった。明治4(1871)年に現在の北海道神宮となる札幌神社を造営する予定の宮地を京都の円山にちなんで、円山村と命名した。開拓後、農作物の多様化・商品化が進み、明治25(1892)年頃から南1条西10丁目を定位置に集団売買取引が行われるようになり、これが後に移転され円山朝市へと発展した。円山の生産農家と札幌の仲買人との間で朝市は自然発生的に形成され、農民が野菜を売ったお金で衣服や日用品を購入することから店が増え、現在の裏参道と呼ばれる通になった。こうした純農村地域だった円山に宅地分譲や住宅誘致が行われ、人口の流入が目

立つようになるのは大正末期からである。大正 10 (1921) 年から昭和 6 (1931) 年の 10 年間に約 6 倍、また、昭和 25 年までに約 10 倍の人口増がみられる。大正

14 (1925) 年の円山振興会による宣伝ポスターには

- 1 円山は北海道総鎮護札幌神社の御在地なり
- 2 土性水質は住宅地として絶好適良なり
- 3 電車は札幌市の南 1 条線に連絡して円山公園下まで全通す
- 4 賃貸料の低廉なるはほかに類なし
- 5 道路は図面 (略) の如く開発させられたり
- 6 学校財産は豊饒なり
- 7 公課金は比較的少なくし
- 8 市域における蔬野の廉価なるは定評あり
- 9 電車終点に電鉄会社直営の娯楽園あり
- 10 円山南麓に札幌温泉土地会社経営の定山溪温泉浴場あり

と、円山の住みやすさを謳っている。この時点では④、⑦、⑧からわかるようにまだ土地としては廉価で農地としての側面が強いことがわかる。

円山の宅地化は道路の整備と交通機関の発達により更に促進されていったと考えられる。昭和 8 (1933) 年、札幌市の都市計画法による計画区域の用途別地域の決定で円山は住宅地区として編入され昭和 16 (1941) 年に円山町から札幌市に合併した。昭和 40 年代からの高度経済成長期になるとマイホーム建設ブームが見られ、高級住宅の建築が相次いだ。この頃南 6 条以南から伏見地区へかけてと、北 5 条以北の土地区画整理も次々に行われ宅地化が進行した。そして昭和 47 (1972) 年、札幌での冬季オリンピック開催に伴い交通網は大きく変化した。昭和 51 (1976) 年には市営地下鉄東西線の白石～琴似間が開通し、円山公園駅・西 28 丁目駅が置かれ都心部と円山地域のパイプ役を果たすこととなった。この地下鉄駅を中心に高層マンションが建設され、南 1 条裏参道の西 20 丁目から 27 丁目にかけては喫茶店やブティックなどが登場し古い街並みから変化していったのである。地下鉄開通を機に昭和 50 年代以降高層マンションや業務用ビルの混在という形が定着し、現在のような高級住宅地のイメージが形成されたと考えられる。

#### 2-4 内田（2013）による先行研究

札幌市円山地区において高級住宅地の形成過程とブランド価値の源泉の調査を行った内田（2013）はブランド論における価値の根拠は価格や販売実績に求めるという通例に従い、地区をその不動産価値によって分析する手法で調査した。内田（2009）は都市計画論や地理学の観点からではなくブランド価値に言及して研究を行い、ブランド価値の源泉を浮き彫りとすることを目的としている。

「高級住宅地の外部環境のなかでも文化的環境の質が重要要因であることを明らかにしている。具体的には優れた義務教育環境を備える地区は、就学児童を持つ若い世帯をその住宅地に流入させる誘因があり、それが住宅地の流動性を高める。その結果として、高級住宅地ブランドが維持されていることを円山地区のデータによって本論文は示している。」と内田（2013）は結論を提示した。さらに、不動産価値を高める要因について不動産業者によるヒアリング、マンション販売にあたっての広告コピーの調査をもとに、地区内の公立小学校・中学校の人気度が重要であると主張している。また、これは義務教育年齢の児童向けの私立小学校が皆無という地方特有の事情によるものだと考察している。

しかし、これはあくまで文化的環境要因の一つに過ぎず、高級住宅地として価値が維持される要因は他にも考えられるのではないだろうか。内田（2009）の研究において使われる「ブランド価値」という言葉の源泉はいかなるものか。さらに、文化的環境の質を高め維持している要因として円山が高級住宅地であるという市民の認識はどこから来るのか、都市のイメージがどのように形成されるのか、不動産価値以外に焦点を当て考察していく。

#### 2-5 東京における高級住宅地

東京における高級住宅地の形成と変容を調査した先行研究として上園（2008）の田園調布、成城、常盤台を事例にした研究、田園調布、成城を事例に調査した今朝洞（1979）の研究がある。これらの先行研究によると戦前期の東京郊外の高級住宅地は民間の電鉄会社や学校法人等の民間資本による計画的な住宅地の開発であることが挙げられる。例として、渋沢栄一が設立した田園都市会社によって開発された田園調布は住宅地としての理想を、欧米を手本に追求しており、乱雑な景観が形成されることを回避するために建築内規として様々な取り決めがなされていた。上園（2008）は高級住宅地において住環境・景観保全のための活動が街づくりの基盤となり高級住宅地としての価値を維持していることを示した。これに対し札幌市円山地は異なり、計画的な開発により現在の高級

住宅地となったわけではない。また、東京における高級住宅地においては高層マンションの建築を制限するよう町内の自治会の取り決めが古くから続き、効果を発揮している。円山地区においては、分譲マンションが札幌市において高い価格帯にあるものの、札幌市内の他の地域に比べ集合住宅が少ないわけではない（内田 2009）。東京における高級住宅地と共通すべき点は、公園や街路樹といった緑の多さである。前述したイメージ調査においても56%の人が「緑が多い」47%の人が「公園が近い」と回答したように、円山地域には円山公園が位置しており自然に近い住環境であるといったイメージがある。住環境の質には緑の多さが関わっていることが上蘭（2008）により指摘されている。

### 第三章 社会空間としての都市、文化資本

#### 3-1 空間の社会的生産

クロード・レヴィストロースは『構造人類学』の中で「空間」が「社会的」であることについて次のように述べている。（1973 365-366）

- (1) 多くの原住民社会はその制度の図式を空間に投影することを、意識して選んでいる。こうした配置に関する事象を研究することは、住民が、彼らの社会構造についてどんなイメージを作り上げているかを知る手がかりを与えるし、そこに見いだされる欠落や矛盾を検討することによって、しばしば彼らのイメージとは異なる、社会の真の構造を知る端緒を得ることができる。
- (2) 都市計画が行われていない都市空間のように、社会が空間に対して、あるいはある種の空間に対して無関心にみえるときでさえ、あたかも意識されない構造がこの無関心に乗じて空の領域に入り込み、象徴的あるいは現実的なやり方で自分のあかしを立ててもするかのように、事は生起する。たとえば、現代の大都市においても、その大部分は、ただいくつかの型に還元されうる空間構造に属しており、それはその下に隠れている社会構造についてのある種の指標を提供してくれる。

レヴィストロースの研究対象は原住民社会であったが、一見すると社会構造を投影していないようにみえる現代の大都市の都市空間のような場合でも、ある種の空間の社会構造を現わしていることを示唆した。

さらに、フランスの社会学者アンリ・ルフェーヴルが、『空間の生産』において空間は生産されるものであると指摘したのに代表されるように、現在の社会理論では空間が人々の実践によって常に作り直されていくものであると考えるのが認識の前提になっている。一章で述べたように、それまで空間はあくまで社会構造が「反映」される場としてしか捉えられていなかった。しかしルフェーヴルは「社会空間」を「身体」から生じてくるもので、「身体」が起点となり空間が広がっていくと考えたのである。都市とは人々の活動や経験の媒介であると同時にその結果となる。現代の都市空間は生産や消費が行われる場所であるだけでなく、利潤を目的とした生産活動の対象にもなるのである。不動産に対する投機や大規模な土木工事、空間の売買等は現代の資本主義社会において重要な経済活動となっている。これについて橋本（2011）は「生産と消費の構造環境は、人為的に生産される空間の主要な形態である。それは重要な投資の対象であると同時に、生産と消費の不可欠の要素である。しかも規模が大きく、移動しにくい性質があるから、これに対する投資は必然的に、都市の景観を形作ることにもなる。」とし、東京の都心部に巨大なオフィス空間と商業空間を生み出した六本木ヒルズを例に挙げ、空間の生産は現代の主要な産業の一つであると述べている。

前述したように、カステルは経済のグローバル化が進み所得格差が拡大したことにより都市の構造が変化していることを指摘している。格差拡大を含めた様々な社会現象は、空間の中で生じるものであり空間に表現されるものである。ルフェーヴルは空間構成の上部構造にあたる都市計画について、建築家は人々の所得や規範、価値意識に応じて建築するため「都市計画とはおのずと階級の都市計画である」としている。地域の内部で格差が増大し、一部の地域に貧困が集積する現象が我々の身近なところでも起きているのではないか。

### 3-2 文化資本

フランスの社会学者ピエール・ブルデューは『ディスタンクシオン』で文化資本と階級の関係について分析している。支配階級とは単に経済的に裕福な人ではなく、優越性を確保するために日常的に資本を蓄え、それを投資することで利益を得なければならない。ブルデューはこの資本を経済資本、文化資本、社会関係資本の3種類に分けて捉えた。経済資本とはそのまま経済的な財産のことで、社会関係資本とは人々が持つ人間関係、社会的ネットワークのことである。ここで説明を要するのは文化資本だろう。文化資本とは広い

意味での文化に関わる有形・無形の所有物の総体を指し、具体的には三種類に分けられる家庭環境や学校教育を通じて各個人のうちに蓄積されたもろもろの知識・教養・趣味・感性といった「身体化された文化資本」、書物や絵画・ありとあらゆる物質として所有可能な財物を「客体化された文化資本」、学校制度や試験により与えられた学歴や資格を「制度化された文化資本」、としている。更に、文化資本の一つの形態として学校制度によって与えられた学歴やそれに付随する様々な個人能力や社会的な価値の総体を学歴資本という概念で表している。

ブルデューは趣味とは自由に選択できるものではなく、階級や教育程度の違いによって選択も異なるもので、文化的欲求は実は教育の産物であるとしている。ブルデューはハビトゥスという概念を用いこれを説明した。

「ハビトゥスは構造化する構造、つまり慣習行動および慣習行動の近くを組織する構造であると同時に、構造化された構造でもある。なぜなら社会界の近くを組織する論理的への分割原理とは、それ自体が社会への分割が身体化された結果であるからだ」  
(ブルデュー 1990)

「ハビトゥスとは日常的に習慣化された行為や考え方もしくはそれらを生み出す内面化された規範のことであり、生活環境によって必然的に異なる。」(伊藤 2009)

このハビトゥスは客観的な生活条件によって条件付けられる。例えば、前述した経済資本や文化資本等の資本の種類割合、資本構造の差異により支配階級内の支配集団と被支配集団の「ハビトゥスの差異」が決定される。人々はこのハビトゥスを身につけることにより無意識のうちに社会構造に従い、その構造を維持し存続させるような行動をとるのである。つまり、同じような生活条件や社会的地位を持つ人は同じようなハビトゥスを持ち、そのハビトゥスによる行動が同じ階級の間を結びつけ分類している。

そして、ブルデューは端的に趣味とはハビトゥスであるとも述べている。趣味とは相続され培われる能力であり、人々を階級システムの中に分類しそれを生成するものだと捉えた。趣味はヒエラルキー化されており正統的と見なされているものを基準に分類される。この正統的と見なされているものは実際のところ無根拠であり、他のものを否定にすることによってその正当性を獲得する。趣味は自由に選択することができるものではなく、家庭環境や教育程度の違いによって選択も異なるものなのである。同様に消費の選択も日頃

の慣習的な行動に元となる資本が関係する。趣味だけでなく料理や服装などの文化の消費により自らを主張し、その差異が社会的アイデンティティを形成している。

ブルデューは芸術作品を鑑賞するためには、生まれつきの先天的な才能によるものではなく鑑賞に必要な知覚をいかに内在化できるかが重要であると指摘している。

作品の理解や評価は、それを見る側の意図、それ自体がある歴史的・社会的状況内での芸術作品との関係を支配する慣習的規範によって決定されてくるような意図にもやはり依拠しているのだし、また作品を見る者がこれらの規範に適応してゆく能力、したがって鑑賞者自身の芸術的素養にも、同時に依存しているものである。

芸術鑑賞という行為は学識という構成要素を持たざるをえなくなってしまったのである。この鑑賞のための美的性向は上層階級になると「意識的に学ぶこと」なしに美的性向が獲得される傾向にあるとブルデューは指摘している。

## 第四章 円山地区における文化資本

### 4-1 札幌市による事業

札幌市は市が推進する「創造都市さっぽろ」事業の一環として、シンボルエリア創出に向けた円山地区のブランド化のための調査・研究との名目で大学提案型共同研究を行っている。

従来の高級住宅地イメージに加えて「食や暮らしを楽しむアーティスト店」などの集積が進行しつつある円山エリアを対象に、1.円山エリアブランド化の可能性、2.アートと生活をつなぐ創造的活動拠点づくり、3.「食の可能性や複合アーツ」など、エリアブランド形成に寄与する事業の創出可能性などを調査・研究することによって、「創造都市さっぽろ」のシンボルエリア形成の可能性と札幌ブランドバージョンアップへ果たす役割を追求する。

また、平成21年度から裏参道（南1条西20丁目～環状通）は札幌市の街路事業の一つとして整備事業が行われている。歩道は約2m歩幅が広がり、車道にも約1.5mの停車帯が設けられる。さらに、電線を地中化、新たに街路樹を植える計画である。こうした市主

導で行われている活動も高級住宅地としてのイメージ維持に関わっていることがわかる。第一章で言及したカステルの主張では、都市計画は価値意識に応じて建築されるためおのずと階級の都市計画であるとされていた。東京における高級住宅地が大会社の資本で行われたように、支配階級にある人がその価値意識、ブルデューの理論でいうハビトゥスに応じて都市計画の構想を行っている。この結果、さらに地域間の格差は増大していくと考えられる。

#### 4-2 円山地区の文化的環境

円山地区は札幌の中でも飲食店が多く集まっている。株式会社コスモメディアが発行する札幌情報誌『poroco』では年1回、円山地域の特集を組んでおり2010年5月号では「ちょっと自分に御褒美を 円山で楽しむ、贅沢グルメ 円山ビューティー特集 美と癒しの融合エリア、円山トータルビューティー」と見出しが掲げられている。住宅地としてだけではなく、札幌市民の外出の場としての人気が高いことがわかる。

また、前述した札幌市の大学提案型共同研究における円山地区の調査報告書によると、『ミシュランガイド北海道2012 特別版』の円山地区の掲載比率を表にし、特にフレンチ・イタリアンの圧倒的な円山地区の集積を指摘している。(表3) ミシュランガイドとはフランスのミシュラン社により出版されているガイドブックであり、星の数によって料理の評価をしている。ビグとは「ビブグルマン」というマークであり、星はつかないが3,500円以下で食事が可能なコストパフォーマンスが高い食事を提供する店のことである。

	札幌全体 →円山地区	うちフレンチ ・イタリアン
3ツ星	3 → 1	1 → 1
2ツ星	8 → 5	0 → 0
1ツ星	21 → 8	8 → 6
ビグ	27 → 7	8 → 4
	59 → 21	17 → 11

表3 ミシュラン北海道掲載店の円山地区集積（札幌地区比率）

また、円山地区には道立の近代美術館が位置している他、円山動物園、円山競技場、といった公共の文化施設も他区に比べ多く存在している。「札幌 美術館」で検索すると、出てくる上位7件は南区に位置する札幌芸術の森美術館を除いて、すべて円山地区に集まっている。

日本において高級とされているフランス料理店や、文化資本が必要とされる芸術鑑賞のための施設が集まっている。ブルデューは食事に関する選好もハビトゥスに従って行われていると論じた。ブルデューの研究対象であるフランスの階級において分析結果では、庶民階級が身体の形よりも男性的な力の方に関心が強く、安価であると同時に栄養のある食品を求めるのに対し、自由業や上級管理職の嗜好は繊細で、洗練されたものへと向かってゆく。食費への経済的拘束が除去されることにより上品さやほっそりした身体を得るための食事が変わっていく。日本においてフランス料理が高級とされる理由は明確ではないが、食文化の消費により自らを主張し、その差異が社会的アイデンティティを形成していることを表している。

#### 4-3 円山地区のマンション、商業施設

現在（2013年12月）東急不動産から販売されている分譲マンション「BRANZ 円山裏参道」は「円山の別格、裏参道の真粹」とキャッチコピーを掲げている。公式のホームページ内では、周辺環境を「磨き抜かれた本物が連なる、この道の中心に棲む。裏参道の粋が集まる優越の場所」と題し、周辺に位置する日本料理店、フレンチ、イタリアンの飲食店を掲載している。ホームページにおいて円山の歴史についても強調しており、「円山の歴史は札幌の歴史。伝統が息づく裏参道の歩み。」とキャッチコピーを載せている。またデザインについて「その佇まいが、すでに上質。裏参道私邸にふさわしい外構・植栽計画。」と掲げ、緑に囲まれた居住環境を宣伝していることがわかる。さらに、隣地境界における一次、エレベーター等の共有部における二次、専有部（防犯センサーやダブルロック）における三次、と三つのゾーンに分類したセキュリティ構造を備え防犯性を高めたゲーテッドマンションとしている。比べて、同じく東急不動産から販売されている（2013年12月建設中）「BRANZ 琴似」はコンセプトに「地下鉄とJR 駅へのW アクセス。新千歳空港に直結。」「スケールメリットあふれる、全94邸のビッグコミュニティ。」と掲げ地下鉄琴似駅とJR 琴似駅への便の良さを売りにしていることから「BRANZ 円山裏参道」との違いがわかる。

住友不動産から販売されている「シティハウス円山裏参道レジデンス」はコンセプトに「円山裏参道、洗練の結晶」と掲げ、「裏参道という伝統が培ってきた洗練と、住友不動産が指向する邸宅の洗練。その結晶は、時を超えて輝きを放ち続けるでしょう。」と「BRANZ 円山裏参道」と同じように高級さを前面に打ち出している。

三菱地所が開発し、その子会社が運営を行っている地価鉄円山公園駅に直結するショッピングモール「円山クラス」の「クラス」とは「上品さ」「気品」という意味をもつ。三菱地所のホームページによると

憩う・癒す・楽しむ。それが「円山らしい暮らし」。札幌の憧れの住宅街として知られる円山地区は、歴史・文化・緑にあふれ、札幌のオアシスと称されています。「マルヤマ クラス」は、まさにこの上質なエリアにふさわしい、憩いと癒しのための「クラブハウス」を目指し、ゆとりあるライフスタイルを提案しています。

とした表記がある。北海道に出店しているダイエー店舗はすべてフランチャイズで、直営店舗はこの円山クラス内への出店が13年ぶりとなっている。ダイエーのニュースリリースによると「円山クラス」内のダイエー直営店舗の売り場の特徴として、

『ダイエー札幌円山店』は、「安心・安全」、「簡便・快適」を基軸にした、こだわり商品の品揃えやサービスの提供に加え、歴史ある自然豊かな円山地区にお住まいのお客様が日々の暮らしを快適に過ごしていただけるように、お客様のご要望にひとつひとつ丁寧にお応えし、地域の皆様に愛されるお店づくりをめざしてまいります。

と掲載されている。こうしたショッピングモールのコンセプトとしても前述した二件のマンションと同じように高級さを前面に押し出し差別化が図られている。さらに、これらの広告から歴史・文化・緑も重要なキーワードとなっていることがわかる。

## 終章

高級住宅地内では文化資本の高い生活環境が形成されている。円山地区には芸術鑑賞のための施設やギャラリー、日本において高級とされているフランス料理等が集まっており、

階級の高い人が好む文化資本が集まっているため、住民に流動性があってもなお価値が維持されていると考えられる。三章で述べたように、資本によって決定されたハビトゥスの差異が人々を階級に分類している。消費の選択にもこの内面化された規範ハビトゥスが元となり、消費により社会的アイデンティティを確立する。その消費の場が都市であると捉えることができる。ルフェーヴルが主張したように「身体」から生じ、「身体」が起点となり広がっていく空間が都市であると考え、その「身体」には家庭環境や学校教育を通じて各個人のうちに蓄積されたもろもろの知識・教養・趣味・感性といった「身体化された文化資本」が内包されている。そのため都市は人々の文化資本が反映され、高級住宅地としての価値、高い文化資本をもつ環境が維持されている。さらに周りから高級住宅地として認識されることで、経済資本、つまり、経済的な財産が多くなければ生活できないように地域内部の経済が高騰してしまっていることも考えられる。

また、高級住宅地を形成する良質な住環境は緑があること、歴史ある土地であることも重要であることが調査からわかった。歴史、「古さ」という属性にはある種の価値が付随している。その住環境を維持しているものは不動産販売会社等の企業主導による経済活動だけではなく、市が主導で行う事業によっても差別化が行われていた。

住んでいる場所が階級の指標となり、人々は社会的地位にふさわしい場所に住もうとする。こうした要素から都市間の格差は固定されており、人々の居住の自由が奪われているのではないか。

## 引用文献

- アンリ・ルフェーヴル. (200). 『空間の生産』・青木書店・
- ピエール・ブルデュー. (1990). 『ディスタンクシオン』・藤原書店・
- マニユエル・カステル. (1999). 『都市・情報・グローバル経済』・青木書店・
- レヴィ・ストロース. (1972). 『構造人類学』・みすず書房・
- 伊藤明己. (2009). 『消費と文化のヒエラルキー ブルデューの趣味論』・関東学院大学経済学部教養学会・
- 橋本健二. (2011). 『階級都市-格差が街を侵食する-』・筑摩書房・
- 今朝洞重美. (1979). 『東京郊外における高級住宅地の変容 田園調布、成城の場合』・駒

澤大学文学部研究紀要・

上藺 栄衣美. (2008). 『東京における高級住宅地の形成と変容-田園調布、成城、常磐台を事例に-』・お茶の水大学地理学会・

大橋薫 近江哲男. (1967). 『都市社会学』・川島書店・

内田純一. (2013). 『高級住宅地の形成過程とブランド価値の源泉-札幌市円山エリアにおける分譲マンションの供給分析-』・地域デザイン学会・

北翔大学・北海道大学共同研究グループ. (2013). 『「創造都市さっぽろ」のシンボルエリア創出に向けた円山地区のブランド化のための調査・研究』・

### 参考文献・参考 URL

井上俊ほか (1996) 『都市と都市化の社会学 岩波講座現代社会学』岩波書店

井上俊ほか (1996) 『時間と空間の社会学 岩波講座現代社会学』岩波書店

福田光弘 (2001) 『H・ルフェーヴルの「空間の生産」概念について』慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要

菅野拓 (2011) 『都市空間をいかに記述するか-「見る者」か「遊歩者」か、それとも?-』大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター

アンリ・ルフェーヴル (2011) 『都市への権利』ちくま学芸文庫

札幌市教育委員会 (1980) 『藻岩・円山』札幌市教育委員会文化資料室

堀淳一 (2012) 『地図の中の札幌 街の歴史を読み解く』亜瑠西社

高橋勇悦 菊池美代志編著 (1985) 『新しい都市社会学』学文社

北澤尚子 (2000) 『現代社会における「文化」の一視角 ピエール・ブルデューの文化的再生産論』金城学院大学大学院文学研究科論集

札幌広告.COM (2013年12月9日)

<http://www.sapporokoukou.com/>

コーナー円山 (2013年12月9日)

<http://www.corner-maruyama.com/>

札幌ヒルズ (2013年12月9日)

<http://futagoyama.jp/>

札幌市 (2013年12月9日)

<http://www.city.sapporo.jp/index.html>

ブランド円山裏参道 (2013年12月9日)

<http://sumai.tokyu-land.co.jp/branz/maruyama-urasando/>

ブランド琴似 (2013年12月9日)

<http://sumai.tokyu-land.co.jp/branz/kotoni/>

シティハウス円山裏参道レジデンス (2013年12月9日)

[http://www.sumitomo-rd-mansion.jp/hokkaido/ch\\_urasando/](http://www.sumitomo-rd-mansion.jp/hokkaido/ch_urasando/)

円山クラス (2013年12月9日)

<http://maruyama-class.com/>